

4. 徳川大坂城にみる大名の石垣普請～肥前佐賀藩鍋島家を例として

徳川幕府による大坂城の再建は、大坂の陣の後、元和6（1620）～寛永5（1628）年の3期にわたって行われた所謂「天下普請」である。再建には多数の大名が動員されており、各大名の普請衆は、採石・石材運搬・石積みの各作業において他家と非常に「隣接した距離感」で各工程に臨んでいる。

採石・石材運搬・石積みの各工程と、作業を担った大名をつなぐ証左の一つが、刻印である。刻印の意味については、依然解明されていない点が多い。ただ、その主たる目的は「所有権の明示」とみられる。即ち、刻印は江戸時代における城郭の天下普請において、参加した諸大名が石垣石を集積した際に、所有権を明確に示すために用いられたと考えられる。刻印を検討し、それを使用した大名を知ることができれば、石垣普請の各段階を有機的に把握することが可能となる。

そこで本稿では、甲山刻印群で発見された刻印「」が彫られた石材（刻印石）を取り上げる。そして刻印「」を用い、甲山刻印群で採石を行ったとみられる肥前佐賀藩鍋島家の石垣普請の体制・経過について確認したい。

1. 甲山刻印群分布の刻印石

甲山刻印群B・E・G地区では、現在までに徳川大坂城石垣普請時に採石されたとみられる石材が、多数確認されている。特にG地区では、通常の石垣石となる築石に加え、東六甲採石場全体でも検出例の少ない角石が集中して発見されている。刻印については、「」が確認されている。この刻印の特徴として、いずれも石材の側面（以下、「控え」と記す）に彫られているため、石垣として積まれた際、正面（小口面）からは見えないことが挙げられる。このことは、これらが「見せる」刻印ではないことを示している。また、「控え」となる2つの面に打刻されている。これらの面は小口面を正面としてみたときL状となるため、どの面が天地になろうとも、必ず刻印が見えるようになっている。

この刻印を使用して甲山刻印群B・E・G地区で採石を行ったのは、肥前佐賀藩鍋島家と考えられる。刻印が鍋島家のものであることについては、前稿（「甲山刻印群E地区と肥前鍋島家の関係について」・「徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群について」）において検討したので詳細は割愛するが、骨子は次の通りである。①史料上において、佐賀藩が「廣田山」にて採石活動を行ったことを確認できる。②大坂城石垣の佐賀藩担当石垣で検出される刻印と当該刻印がほぼ一致する。

以上のことから、かつて甲山刻印群B・E・G地区において採石したのは、佐賀藩と考えられる。

2. 佐賀藩鍋島家の普請体制

本節では、佐賀藩鍋島家の普請体制について確認したい。

佐賀藩の公式編纂史料である「勝茂公譜考補」によると、大坂城再建の第2期及び第3期工事の普請体制が記載されている（第1期工事に関しては記載がないため不明）。これによると、第2期・3期とも、役職の種類は12種、総勢42名となっており、両方の時期の間で参加者は半数近く入れ替わっている。また役職名も第2期では「御目附」であったものが、第3期では「横目」と変化している。

役職とその人数を見ると、「四組頭」が4人、「二百人頭」については、4人ずつで一集団を形成している。『佐賀県近世史料』に収録されている「竹田聞書之内」によると、

「（上略）此節普請奉行諫早右近、相談人鍋嶋喜右衛門・嬉野織部・鍋嶋市佑也。其下四人の奉行有り。中野又右衛門・葉利左衛門・嬉野与右衛門・南里大膳也。此一人に又四人宛の馬乗侍を小頭と定む。山

本甚右衛門など其内なり。此一人に又五人宛の奉行あり。此時ハ物成百石に三人宛の人夫を被差出、都合人数五千人也。(下略)」

とある。つまり、四組頭を筆頭とする組が4組あり、1つの組に4人の小頭(二百人頭)がおり、さらにその小頭(二百人頭)1人につき5人の奉行が付くという。二百人頭については、その1人である山本神右衛門重澄に対し、「普請者式百人被相付被差出候」(「山本神右衛門重澄年譜」)とあることから、実際に200人程度を指揮していたとみられる。彼ら人夫は、いくつかのグループに分けられ、作業工程や小さな採石丁場ごとに、業務に従事していたとみられる。

このように一つの組には、1人の組頭、4人の二百人頭、20人の奉行がおり、さらに奉行の下に人夫が組織されている。幕府が各大名を4つの組に編成した上で、それぞれ石垣丁場を割り当てたように、佐賀藩鍋島家の普請衆においても4組に編成し、各組に丁場を割り当てていたのは興味深い。

また先の「竹田聞書之内」によると、普請の人夫は総勢5000人という。この数字が正確なものか慎重を期す必要もあるが、あながち誇張というわけでもなかろう。なぜなら、名古屋城普請に関係する慶長15年(1610)6月15日「鍋島勝茂書状」(『肥陽旧章録』)には、「四千四五百人も候得共、是も不足にて雇千余にて毎日雇申候」とあるからである。大坂城においても、この程度の数の人夫を動員していた可能性は高いと言える。

佐賀藩の石工集団についても若干述べておきたい。佐賀県小城市牛津町の砥川地区は、石工集団の町として有名であり、現在、石工の里公園として整備されている。元和3(1617)年推定の「鍋島勝茂書状」(「坊所鍋島家文書」)では「黒筑州より石切り御雇候ニ付而」とあり、この件の関連史料である「石井清五左衛門尉茂清書状」(「坊所鍋島家文書」)では「砥川石切」とある。これは、黒田長政が江戸にて必要な石工を融通するため、佐賀藩に打診してきたものと考えられる。当然、元和・寛永期の大坂城普請においてもこの砥川の石工を動員している可能性は十分にあると思われるが、史料がないため採石活動や石垣築造に参加したかは不明である。

以上、佐賀藩の普請体制を確認してきた。それによると、組ごとに、1人の組頭・4人の二百人頭・20人の奉行がおり、さらに奉行の下に人夫が組織されていた。彼らは、作業工程ごと、もしくは作業場ごとに分かれて作業に従事していたと考えられる。

3. 佐賀藩鍋島家による石垣普請の経過

前節でみた体制で臨んだ佐賀藩鍋島家による石垣普請の経過がどのようなものであったか、主にその採石の様子について文献史料から確認したい。ここでは3期にわたる大坂城再建工事のうち、佐賀藩に関して比較的まとまった史料が残り、確実に甲山刻印群で採石を行ったことが窺える第2期工事についてみていく。なお、大坂城再建第2期工事は、石垣普請が中心の寛永元(1624)年工事、水堀掘削が中心の寛永2(1625)年工事に区分することができる。ここでは寛永元年の工事について取り上げたい。

まず、『本光国師日記』・「渋谷文書」・「大村家文書」等によると、大坂城普請を翌年(寛永元年)に行うこと、及びその普請の開始日が2月1日であることが諸大名に正式に通達されたのは、元和9(1623)年7月から8月にかけてのことである。年が明けて元和10(1624)年正月5日には、徳川秀忠が普請の条目「定」を制定し、普請が開始された(『東武実録』)。9月3日には普請の成功を賞した秀忠の黒印状が発給されており(『中川史料集』)、ここに本丸石垣工事の普請が完了したものと考えられる。

ついで、幕府による寛永元(1624)年の第2期工事に関する正式な通達後の佐賀藩鍋島家の動きを、「勝茂公譜考補」から確認したい。元和9(1623)年11月1日、鍋島勝茂が、大坂城普請に関する3

ヶ条の手頭（掟書）を家老の諫早右近允直孝に下している。同月 22 日には、勝茂と勝茂生母の陽泰院が佐賀城本丸において大坂城普請衆を引見している。大坂城普請衆は翌 23 日に佐賀を出発している。ただし、元和 9（1623）年春には「廣田山」において鍋島家による採石が開始されている。勝茂から家老の諫早直孝に下された寛永元（1624）年 3 月 18 日付の書状（「勝茂公譜考補」）には次のようにある。

「（上略）將又福地六郎右衛門摂州廣田山ニ而、從去春十月切ニ石取申付候処ニ、日数十日早請取之石数仕廻。其上築石二百、角石五ツ出来かし候由、主馬允申越之由承届候。六郎右衛門かせき之程令満足候。（下略）」

ここから、佐賀藩鍋島家は正式な第 2 期工事の石垣普請の通達に先立って、元和 9（1623）年春から 10 月にかけて「摂州廣田山」、即ち甲山刻印群において採石を行い、「築石二百、角石五ツ」を得ていたことが知られる。この史料に登場する「福地六郎右衛門」とは、佐賀藩の大坂城普請衆のうち、第 2 期・3 期で「行合奉行」という役職を務めた人物である。この「行合奉行」とは、石材等の運搬に関係した役職だと思われるが、詳細は不明である。

福地六郎右衛門は「二百人頭」を務めた「園田利兵衛」とともに、普請衆本隊に先立って佐賀を出発している（「勝茂公譜考補」）。園田利兵衛は、第 2 期は二百人頭、第 3 期は行合奉行を務めた人物である。彼らは「福地六郎右衛門・園田利兵衛ハ先達テ罷り立ち、戸田左門殿領内廣田山へ取置タル三間角石并石垣、石船ニテ段々大坂へ致運送」（「勝茂公譜考補」）という業務に従事している。「廣田山へ取置タル」という表現からすると、福地・園田の両名は、元和 9（1623）年春から甲山刻印群において採石作業の指揮をとっていたのであろう。このような点から、元和 9（1623）年春以前の段階より、鍋島家は甲山刻印群を採石丁場として確保していたと考えられる。

また、春～10 月に採石活動を、11 月～翌年正月にかけて運搬を行ったことも注意される。ちょうど前者は農繁期・後者は農閑期にあたる。山間部で行う採石活動に比べ、石の運搬作業は搬出路の造成など近隣農民に与える影響が大きい。そこで、採石を農繁期・運搬を農閑期にあて、農民に与える影響を最小限に止めようとしたのであろう。これは寛永 2（1625）年の第 2 期工事においても、普請の発令が元和 9（1623）年 7～8 月で開始日が翌年 2 月 1 日とされたことから傍証される。同様に第 1 期工事においても、元和 5（1619）年 9 月 16 日に、秀忠が酒井忠世・本多正純・土井利勝・安藤重信ら 4 老中連署の奉書をもって、諸大名に対し、来年 3 月 1 日開始の築城工事への参加を命じている（「黒田家譜」）。このことから、幕府側でも工期に関する配慮がなされたと考えられる。

なお石材の運搬に関して、兵庫県西宮市甲陽園在住の松浦 淳氏（大正 15（1926）年 2 月 27 日生）は、甲山刻印群 B 地区にあたる現在の西宮市甲陽園目神山町の古老から、「目神山は江戸時代の大坂城再建時の石切り場で、石を運ぶために目神山から今津の港まで竹を三重に敷いた。今津の港から大坂城までは船であった。」という伝承を聞いているという。甲山刻印群 B・E・G 地区に端を発する御手洗川は、今津で大阪湾に注ぎ込んでおり、この伝承の信憑性は高いと言える。

「勝茂公譜考補」によると、元和 9（1623）年 12 月には勝茂が再び諫早右近に大坂城普請に関する掟 13 ヶ条を下し、一方大坂城普請衆は、そのまま作業の継続のため「廣田」にて越年している。彼らが「廣田山」での作業を終えたのが、元和 10（1624）年正月 27 日のことである。翌日には普請衆は大坂に到着しており、2 月 1 日から石垣普請に取り掛かったものと考えられる。この後も「福地六郎右衛

門・園田利兵衛ヨリ、又運送ニ成タル石モアリ。」とあるように（「勝茂公譜考補」）、福地六郎右衛門・園田利兵衛は「廣田山」に留まり、大坂へ石垣石を供給し続けたようである。元和 10（1624）年 2 月 21 日「鍋島監物茂泰書状」（「坊所鍋島家文書」）で、石垣に用いる「大石」を「御影石場」に取り置いておくよう指示したことがみえるのも、佐賀藩の普請衆の一部が採石丁場に留まり、大坂への運送に従事していた証左となろう。

2 月 30 日には改元され、元和 10（1624）年は寛永元年になった。「勝茂公譜考補」によると、3 月 16 日には、石垣丁場での作業の際に、筑前福岡藩黒田家の普請衆と石垣石を運搬する順序をめぐって喧嘩に及ぶなどのトラブルもあったようだが、普請自体は順調に推移したようである。4 月 1 日には、勝茂から再び諫早直孝に、大坂城普請に関する定書が下されている。8 月には石垣普請が終了したため、普請衆は佐賀に帰着している。

以上のように、佐賀藩鍋島家は、元和 9（1623）年春以前から「廣田山」即ち甲山刻印群を採石丁場として確保していた。そして、そこで得られた石材を、寛永元（1624）年第 2 期工事の大坂城本丸石垣普請に供給し利用していたのである。

おわりに

本稿で明らかにした点についてまとめると、①甲山刻印群の一部において、刻印を用いて採石を担当した佐賀藩鍋島家は、1 人の組頭・4 人の二百人頭・20 人の奉行を置き、奉行の下に人夫を組織する体制で、採石及び石垣丁場ごとに分かれて作業に従事させていた ②佐賀藩鍋島家は、元和 9（1623）年春以前から「廣田山」即ち甲山刻印群を採石丁場として確保しており、そこで得られた石材を、寛永元（1624）年第 2 期工事の大坂城本丸石垣普請に供給し利用していた の 2 つとなる。

本稿では、主に文献史料を利用して大名の石垣普請について考えた。今後も近世城郭の石垣及び採石場調査の成果を文献史料によって確認していく作業は、重要度を増すと考えられる。天下普請では多数の藩が動員されており、それぞれの藩で、家の成立事情・領内の統治機構・家臣団の編成原理・対幕府との政治状況などが異なっている。当然この違いは、普請に臨む姿勢にも反映するものと考えられる。各藩の方針を反映した普請体制は、石垣普請の各段階（採石・石材運搬・石積み）における作業や丁場内での行動原理に影響するものとみられ、大名独自の刻印の発生やその種類にも関係することが予測される。

当面の近世城郭における石垣普請研究の目的の一つに、石垣や採石場遺構、文献史料などから、藩各々の事情・状況を丁寧に検証していくことが挙げられるだろう。本稿がそのための一助となれば、幸いである。

〔参考文献〕

- 内田九州男「徳川大坂城再築工事の経過について」『大坂城の諸研究』名著出版 1982
- 関西学院大学考古学研究会「徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群 E 地区調査報告」『関西学院考古』第 10 号 2007
- 関西学院大学考古学研究会「甲山刻印群 G 地区角石丁場の概観」『関西学院考古』第 10 号 2007
- 黒田安雄「家臣団の編成と構成」『佐賀藩の総合研究』吉川弘文館 1981
- 北野博司「石垣普請の風景」『城郭シンポジウム－石垣普請の風景を読む』東北芸術工科大学 2003
- 「近世城郭と石垣普請の実像」『日本歴史』696 号 2006

高田祐一・望月悠佑「甲山刻印群E地区と肥前鍋島家の関係について」『関西学院考古』第10号 2007

高田祐一・望月悠佑「徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群について」『ヒストリア別冊 天下普請を支えた石材の調達』(仮)、2008年度発行予定

高野信治「成立期軍制の編成原理」『藩国と藩輔の構図』名著出版 2002(初出は1985)

藤井重夫「大坂城石垣符号について」『大坂城の諸研究』名著出版 1982

藤川祐作「摂津大坂城(十)」(『城と陣屋シリーズ』第168号 1985

古川久雄「徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群の概要」『関西学院考古』第10号 2007

村川行弘『大坂城の謎 改訂新版』学生社 2002

〔引用史料〕

「大村家文書」- 内田九州男「徳川期大坂城再築工事の経過について」『大坂城の諸研究』名著出版 1982、及び『大坂城再築関係史料』大阪市史料調査会 2008

「勝茂公譜考補」『佐賀県近世史料』第1編第2巻、佐賀県立図書館 1994

「寛永五年惣着到」(『佐賀藩着到帳集成』、佐賀県立図書館内古文書研究会 1981

「黒田家譜」『大日本古文書』第12編之31、東京帝国大学文学部史料編纂所 1933

「渋谷文書」 渡辺武・内田九州男「大坂城天守閣所蔵大坂築城関係史料」『大阪城天守閣紀要』2 1972、及び『大坂城再築関係史料』大阪市史料調査会 2008

『新訂本光国師日記』第5、続群書類従完成会 1970

「竹田聞書之内」(『佐賀県近世史料』第8編第3巻、佐賀県立図書館 2007

「東武実録」『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第1巻、汲古書院 1981

『中川史料集』新人物往来社 1969

『肥陽旧章録』 城島正祥「慶長元和期の佐賀藩財政」『佐賀藩の制度と財政』文献出版 所収 1980(初出は1963)

「坊所鍋島家文書」『佐賀県史料集成』古文書編第11・13巻、佐賀県立図書館 1972

「山本神右衛門重澄年譜」『佐賀県近世史料』第8編第1巻、佐賀県立図書館 2005